

「日の丸」の起源は日高見国が

絵巻に描かれた蝦夷の旗印

毎日新聞 99(H11).8.17

「国旗」と「国歌」が注目されている。

長い間法制化されていなかったという事は、この問題が日本史の根幹に触れるからなのかもしれない。

「君が代」に「くらべ」「日の丸」は、大変に人気があるようだ。白地に赤のシンボルなデザインは、きわめてモダンで印象的である。



安藤 真

ある。この「日の丸」の起源はいつごろであろうか。

先日、不思議な絵巻物を見る機会があった。それは大和朝廷の軍勢と古代東北の住民・蝦夷の戦闘シーンである。蝦夷の兵の姿は、耳の先が尖り、手の指は四本、足の指が二本にカリカチュアライズされていて、学問的には全く参考にならないものである。

ただ注目すべきことが一点あった。それは蝦夷の軍船に描かれた十コ丸の旗。一体これは何を意味しているのだろうか。

近畿に政権を樹立した天皇側ではなく、東北の先住民・蝦夷の国のシンボルとして「日の丸」が示されていると考えられ

いであろうか。

「清水寺縁起絵巻」は、大和絵中興の祖といわれる土佐光信（一四三四〜一五二五）によって、坂上田村麻呂軍に打ち破られる蝦夷軍の戦いが描かれている。

この「絵巻」の目的のひとつは天皇政府の「蝦夷征伐」を美化し正当化することであろう。戦闘の場面は八世紀の末であり、描かれたのは十六世紀の初頭である。この時代にあつては「日の丸」が天皇政府側にとつてさほど重要な意味を持っていなかったのかもしれない。絵師はすなおな気持ちで当時の「常識」を絵巻の上にするしたのではなからうか。

ところで七世紀頃まで、列島の西半分は「倭」という国があり、東の地域に「日高見国」があったことが研究されている。この「日高見国」こそが、坂上田村麻呂によって滅ぼされた蝦夷の国であった。

「東の夷の中に日高見国あり…是を繪べて蝦夷と曰ふ。また土地沃壤えて広し。撃ちて取りつべし」（『日本書紀』巻七 景行天皇 二十七年条）

東北大学の名誉教授・高橋富雄氏は、この「日高見国」の別称が「日の本」で、その「日の本」の漢字表記が「日本」だと述べておられた。「日高見国」

は「日本」であり、その「日本」は東日本にあつたことになる。どうやら七世紀まで、この列島に「倭」と「日本」という国が並立していたことになるようだ。七世紀は激動の時代で、「白村江の戦い」（六六三年）に大敗し、朝鮮半島へのルートを開ざされた大和政府は、この列島の東北経営に狂奔していた。そのため一番有効な政策は、日高見国（日の本・日本）を征服して、その国号を横奪して

自らが「日本」を名乗り、この列島の主権者であることを宣言することであつたのかもしれない。



「清水寺縁起絵巻」から

『新唐書』の「日本国伝」にはそのあたりの事情が明確に指摘されていた。

「日本は古の倭奴（わど）・中国が我が国を称した語（なり）」

さらに、「日本すなわち小国、倭の併せる所となる。故にその号を冒す」

大國の倭が小國の日本を合併し、その国号を奪ってしまったというのが、自らが「日本」を名乗り、この列島の主権者であることを宣言することであつたのかもしれない。

小國の日本は日の本であり、日の本は日高見国で蝦夷と呼ばれた人々の国であつた。

『清水寺縁起絵巻』には、蝦夷の軍船が登場しており、その船縁にベタベタと十コ丸の旗が描かれていた。

やはり日本・日の本・日高見国は「日」がメインであり、真っ赤な日輪がシンボルであつたのではなからうか。

「君が代」とくらべて「日の丸」は大変に人気がある。それは列島土着の血統であるあまりにも多くの人々が伝えられているからなのではあるまいか。古代・中世・近世・現代へと引き継がれてきたものが、「日の丸」なのであろう。（あんど・まこと）文化人類学者



「清水寺縁起絵巻」部分拡大